

永仁の壺

左京区 田中 誠孝

昭和34年に重要文化財に指定された「永仁の壺」というのがある。鎌倉時代の古窯から発見された「永仁二年銘瀬戸瓶子」で重文決定は当時文部技官・文化財専門審議会委員からの強い推薦によるものであったという。しかし重文決定直後から「永仁の壺」は偽物ではないかという疑惑の声があった。結論を言うとその壺はやはり偽物であった。それを作ったのはかの有名な加藤唐九郎である。2年後に重要文化財は解除され、推薦した担当者は文部技官を辞任し加藤唐九郎の人間国宝も辞退に至ったのである。その経緯について

は松井寛進著「偽作の顛末 永仁の壺」や村松友規著「永仁の壺」に詳しく記されている。それを紹介すると事の顛末は左記のごとくである。

唐九郎が知り合った人物が、昭和12年にアジアを統合する新しい宗教を作る構想を持ちかけ、鎌倉時代に新羅から入ったという白山信仰を柱に大陸と日本の両方に総本山を置くので、その神器にする瓶子一对、狛犬一对、香炉を唐九郎に焼くように頼んだ。しかし戦局が変わって新宗教の話はご破算になった。唐九郎は焼いた瓶子を窯から出したあと弗化水素の液を掛けて古色を付け、自宅の裏山に埋める。五年余り経ってから掘り出し、「壺」を知りあいの志段味村(しだみむら)村長に「お宮から出たものだが、土から掘り出したことにしてくれ」と言って持ち込む。



永仁二年銘瀬戸瓶子

瓶子の一つを持っていて、シンボルとしてこの瓶子を置こうということになった。そして箔を付けるために道路工事現場から出土したように見せかけたのが「永仁の壺」事件のはじまりである。又その頃、唐九郎は自作の古瀬戸に見せかけた破片を、「松留窯」出土と偽って根津美術館に寄贈したりもしている。元文部技官・文化財専門審議会委員は「永仁の壺」を真作とした根拠の1つに、「永仁の壺」と同様の陶片が、この作品が作られたとされる瀬戸の「松留窯」から出土していたことにあった。

根津美術館に「瀬戸の松留窯からの破片」を寄贈した加藤唐九郎は館員に愛知県志段味村長が「永仁銘瓶子」寄贈の意思があることを伝える。愛知県志段味村(しだみむら)村長が「永仁銘瓶子は私のもの」と根津美術館三矢館長に告げ高額を要求したという。提示された金額の1/3程度を礼金として用意していたが館長は寄付ということであったのにと機嫌を損ねてしまいその話はなかったことになった。

唐九郎の数々の布石が功を奏してか、昭和34年に文部技官・文化財専門審議会委員の提案により文化財専

門審議会で海外に文化財が流れるのを防ぐ必要もあって「永仁の壺」の重要文化財指定が決まってしまった。

「永仁の壺」が重文に指定されると偽物説が流れはじめる。古瀬戸の作品にもいかがわしいものがいくつも出てきた。これらの疑問を解決しようと、古瀬戸の名品が日本中から集められ、台の上に並べられた。本多静雄氏(実業家、陶芸研究家)によると「並べ終わった途端、台上の偽物と本物がだれの目にも一目瞭然とわかった。みんなの目が「永仁の壺は駄目だ」ということを語っていた。本当に不思議な瞬間だった。私は本物と偽物とを幾つも並べてみることにいかに大切であるかをやというほど知らされた。」と記されている。

昭和35年、唐九郎と加藤(岡部)嶺男(唐九郎の長男)は相次いで「永仁のツボは私がつくった」と告白する。この両者の告白の詳細については紙面の都合上割愛する。

唐九郎の作った志野茶盃一碗は高級車ほどの値がつくものがあるという。陶芸の世界は壺中有天と我を忘れさせるものがあるのだろうか。